令和6年度第1回自立支援協議会定例会議事録

開催日：令和6年7月26日（金）
時 間：14時より15時20分まで
場 所：アクロスあらかわ1階多目的ホール

事務局：

定刻になりましたので、ただ今から令和6年度第1回荒川区自立支援協議会を開催させていただきます。本日はお忙しい中お集まりいただきましてまことにありがとうございます。本日司会を務めさせていただきます障害者福祉課長の〇〇です。よろしくお願いいたします。最初に福祉部長の〇〇よりご挨拶を申し上げます。

〇〇福祉部長：

荒川区福祉部長の〇〇です。本日は本当にお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。私の方から一言ご挨拶を申し上げたいと思います。皆さんご存じのように昨年度荒川区障がい者総合プラン、6年計画を策定したところです。そういった意味では本日もこのあと新たな取り組みについて等、所管の方からご報告を申し上げますけれども、区としてプランに掲げた施策につきまして、全力で推進していけるように頑張っていきたいと思っておりますので皆様のご支援・ご協力をお願いできればと思います。

今日も暑いですが、今年は熱中症警戒アラートが東京都でどれくらい出ているかを見まして、去年の倍のペースです。去年の今ごろだと6回だったのがもう昨日の時点で14回出ています。今年は災害級の暑さということもあり、昨日区の特別委員会があつて、『シルバー人材センター』の議論をいただきました。『シルバー人材センター』の方々結構学童の送り迎えとか、駅前の自転車対策をいろいろやっているのですが、やっぱり「この暑い中で大丈夫なのか」というようなところがありまして、『シルバー人材センター』の人と協議しながら、よく作業する方が着ているファン付きのベストか何かを支給する形で新たな取り組みをしております。皆様におかれましてもこの暑さをうまくしのいでいただくよう工夫していただければと思います。また、昨日も山形で2回にわたって警報が出るというすごい線状降水帯の動きがありました。夏でございます。皆様も出る機会もあるかと思っておりますのでくれぐれも事故等に合わないようご注意ください。それでは本日の協議会よろしくお願いいたします。

（事務局による資料の確認と委員の紹介 次第・資料1～3・参考資料1～3）

当事者団体からは『荒川区視力障害者福祉協会』〇〇委員、『荒川区聴覚障害者協会』〇〇委員、『ピアカウンセラー、荒川やさしい街づくりの会』〇〇副会長、『アライな当事者会、荒川たびだちの会、ピアなかまのわ』〇〇委員、『荒川区心身障害児者福祉連合会』〇〇委員の代理で〇〇委員、『荒川精神障害者家族会（荒川めぐみ会）』〇〇委員（欠席）、『社会福祉法人 荒川区社会福祉協議会』〇〇委員、官公庁からは『荒川警察署 生活安全課長代理』〇〇委員、『荒川消防署 住宅防火対策担当係長』〇〇委員、『足立公共職業安定所（ハローワーク足立）』〇〇委員、民生委員・児童委員協議会からは『荒川民生委員・児童委員協議会』〇〇委員（欠席）、医療関係団体からは『一般社団法人 荒川区医師会』〇〇会長、相談支援事業者からは『区立精神障害者地域生活支援センター（支援センターアゼリア）』〇〇委員、『社会福祉法人 すかい』〇〇委員、『荒川区障害者基幹相談支援センター』〇〇委員、就労支援関係団体からは『特定非営利活動法人 荒

川区心身障害者事業団』〇〇委員、『荒川区障害者就労支援センター（じょぶ・あらかわ）』〇〇委員、サービス提供事業所からは『株式会社 大起エンゼルヘルプ 荒川ケアセンター』〇〇委員、『有限会社 ビーブル介護サービス』〇〇委員（欠席）、『社会福祉法人 荒川のぞみの会 作業所ボンエルフ』〇〇委員（欠席）、『特定非営利活動法人 かがやき』〇〇委員、『社会福祉法人 窓の陽（まどのひ）』〇〇委員、『区立心身障害者福祉センター（荒川たんぼぼセンター）』〇〇委員、『区立荒川生活実習所』〇〇委員、教育関係機関からは『東京都立花畑学園』〇〇委員、『東京都立墨田特別支援学校』〇〇委員、『区立教育センター 特別支援教育係』〇〇委員、『荒川区特別支援学級設置校長会』〇〇委員（欠席）、区からは〇〇福祉部長

事務局：

議題に入らせていただきますけれども、ここからは本日の会の進行を自立支援協議会の会長でいらっしやいます〇〇会長をお願いいたします。

〇〇会長：

本日はお暑いところお集まりいただきまして誠にありがとうございました。先ほど〇〇部長からもお話がありましたとおり、最近の暑さは本当に異常で、毎年毎年最高の気温を記録します。雨量も、今までにかつてない最高雨量を記録しております。それが現在の日本なのですね。冬は結構寒いし、夏は暑いし、こういう状況は心身障がい者の方にとっても非常に辛いものがあると思うのです。防げるものと防げないもの、お金がかかるものとかからないものがありますけれども、まず、防げるものは我々で防いでいって、障がい者の方の障害にならないような環境をこれから作っていかねばならないと思います。長期的にはお金がかかっても、やはり区としてやっていただきたい事は、その中でどんどん意見を言っていて、荒川区が今までどおり住みやすい区であるようにと祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

それではこれより令和6年度第1回荒川区自立支援協議会を開催いたします。

議題3.「令和5年度基幹相談支援センター実績報告」、議題4.「令和5年度モニタリング検証結果報告及び6年度の実施について」基幹相談支援センターの〇〇委員お願いします。

〇〇基幹相談支援センター所長補佐：

ただいまご紹介にあずかりました『社会福祉法人ソラティオ』、『荒川区障害者基幹相談支援センター』の所長補佐をさせていただいております〇〇と申します。私からは『基幹相談支援センター』の昨年度の実績報告と次第にはあるのですけれども、実績報告という数字を並べてという印象はありますけれども、それだと皆さん今くらいの時間だと眠くなってしまったりすると思いますので、活動報告という形で「聴くをツナグ鍵」というテーマで報告させていただければと思っています。よろしく願いいたします。

まず、『基幹相談支援センター』の機能・役割を簡単におさらいさせていただければと思います。

『基幹相談支援センター』は当初から四つの軸として、総合専門相談、地域の相談支援体制の強化、地域移行・地域定着、権利擁護・虐待防止の四つの軸でやって下さいと言われていました。ここ近年は、こちらにあるように特に地域の相談支援体制の強化の取り組み、相談専門員さんや相談にまつわる業務をやっている方々の支援や人材育成、そういったことを通じての強化の取り組み。それから自立支援協議会もそうですけれども、協議会を通じた連携の緊密化、いろいろな機関と連携をしながら地域づくりをしていく、この二つに特に注力していただいております。そういった中で『基幹相談支援センター』の昨年度の活動をタイムラインで載せて

みました。上半期、下半期という形になってはいますが、先ほども申し上げたとおり、相談支援体制の強化に注力していくということもありますので、おのずとこの部分のボリュームが厚くなっているのを見て分かっていただけたらと思います。

相談部名ごとの相談実績推移の数字、グラフですけれど、頑張っていていただいているが、先ほどから相談支援体制の充実をとっていることを言っている割には、この表を見ていただくと資料の青い部分、総合相談などの数が多く見えるかと思います。これは、私たちは相談をいただいて、相談支援専門員さんなどに伴走支援をさせていただくのですけれども、そういう場合は結構総合相談という形で分類をさせていただく場合があります。ただ、関わりの中では相談専門員さんに伴走しながら OJT やスーパーバイズ、そういったところも織り交ぜながら関わらせていただいている。ただ数値としてはどちらかにカウントしなければいけないので、事例を通じて関わっているのは、総合相談のところにカウントしてしまうことはあるのです。そういった中でやっぱり動いているけれどもなかなか数字に表れていない部分もあるということです。

『基幹相談支援センター』に相談をお寄せいただく事例としては、やっぱり重層的・複層的な課題がいろいろ積み重なっているような事例がある時に『基幹相談支援センター』にご相談いただく事例が多いわけです。そういった中で感覚的なのか、肌感覚なのか、昨年度の感じと言いますと、高齢分野の方、包括さんやケアマネさんからの相談をいただいて連携していく事例も大分増えてきている状況であります。

ここからちょっと実際にどんな事例があるか二つご紹介させていただきます。事例1.相談専門員から『基幹相談支援センター』に相談をいただいた事例。事例2.地域包括支援センターの相談員さんから相談をいただいた事例となっています。

事例1.相談支援専門員さんから相談を寄せられた事例です。相談支援専門員さんがモニタリングしている中で、経済的な課題（お金の管理の問題）がありそうだとところをキャッチしたのですが、高齢（80代）の母に聞いたところ「大丈夫です」と言われて、うまく聞き取ることができなかった。相談支援専門員さんは高齢だということもあって、地域包括支援センターに関わっているだろうということで包括さんに協力を仰いで相談をしたけれどもうまくできず、こちらの意図が伝わらなかったため、どうしたら良いでしょうかという相談。『基幹相談支援センター』にそういう相談をいただいて、こちらの対応としては、関係機関と連絡を取り合って調整したり、関係者会議を開いて、状況の整理とか役割分担をさせていただいています。

事例2.地域包括支援センターの相談員さんから相談をいただいた事例に関しては、お母さんに介護保険サービスが入っている。それでケアマネさんや『地域包括支援センター』が関わっているのだけれども、同居の二女の拒否によってお母さんのサービスがうまく入れないことがあるというような事例でした。こういう事例で相談いただくことが割と多いのですけれども、こういったところでお母さんの支援者さんたちが困っている。「ちょっとどうにかしてくれないか、一緒に考えてくれないか」ということで関わりました。『基幹相談支援センター』としてのサポートをさせていただいた内容は、これも関係者会議を開いてそれぞれの側面から情報を共有させてもらって、整理するようなことを主にさせていただいています。この二つの事例は共通して言えるところがありまして、ケア会議とか関係者会議を開催させていただいているところです。

『基幹相談支援センター』に相談をお寄せいただいた事例は、関係者会議を軸として、状況整理とか支援方針を整理するというようなことをさせていただくことが結構多いです。ケア会議を軸として関係機関連携をサポートさせていただく中で気づいたことは、皆さんそれぞれの立場、さっきの事例で言えば本人さんの立場とか、お母さんの立場とかそれぞれの立場で自分自身の役割をどうしたらよいかを考えて、一生懸命向き合っているのです。ただ、一緒にやろうとすると、お互い支援者同士がぎくしゃくしている状況が往々にして見受けられると思います。皆さん

も感じられることがあるのではないのでしょうか。

これは何でなのかというところです。私はコミュニケーション不足ではないかと感じています。正直申し上げるとしょうがないところはあるのです。皆さんそれぞれ、例えば娘さんの支援者さんは娘さんの利益を優先したいし、お母さんの立場の支援者さんはお母さんの利益を優先したいし、それぞれ優先したい気持ちがあるがためにぶつかってしまう。なかなかお互いの気持ちが通じなくなってしまうというコミュニケーション不足に陥ってしまう理由の一つではないかと思っています。『基幹相談支援センター』として関係機関の連携のところをサポートさせていただくに当たって、大事にしていったことです。

これは年度を振り返ってみて、改めて私たちは何を大事にしていたのだろうかという話の中で出てきたことです。それは「聴く (listen)」というのと、もう一個の「訊く (ask)」です。どういうことかと言うと、まず『基幹相談支援センター』にご相談をいただいたとき、支援関係者との個別のやり取りも『基幹相談支援センター』はさせていただくわけです。そういう中で「こういう状況でああいう状況でこうなのです」と状況を聴くわけです。まず耳を傾け状況を把握させていただく。その次にもう一つの「訊く (ask)」の方です。これがないと『基幹相談支援センター』としてはやっていけないのではないかと思います。ただ状況を聴いているだけ、状況を把握するだけじゃいけないのです。ちゃんとこちらからも「これはどうなのでしょう、あれはどうなのでしょう」と訊きながらちゃんと深めていく。その状況をしっかりと的確に受け止めていくことが必要です。まず、二つの「きく」で受け止めるということをするのです。あとは支援者同士が考えて思いを聴き合える場、先ほどのケア会議の場が軸になっていましたけれども、こういう場を作るといえることです。お互いにお互いの気持ちをちゃんと伝え合える場、その場の設定をしなければいけないので、そういう意味ではファシリテーションスキルなど、そういったものが必要になってきます。それから会議の中で「そういうふうに思っていたのですね」とお互いの気持ちを確認し合った後、「ところで本人はどう思っているのでしょうかね」ということを尋ねるわけです。何で尋ねるかと言うと、支援者同士の思いが通じ合ったときには、これは支援者の考えとなっている場合があるわけです。これは支援者の考えではなくて、本人はどう思っているのだろうか。本人中心に戻していかなきゃいけないのです。そうした時に「いろいろ話していただきましたけど、本人はどういうふうに感じているのでしょうかね」という問いかけがとても大事なのではないかと思います。そういう中で本人中心というところに持っていったところで「じゃあ、皆さんがそれぞれの立場でできることって何でしょうか」ということで役割分担をしていくと、それぞれが主体性を持って世帯やこの方に関わっていくときに、自分にはこういうことができるだろうというのを、しっかりと本人中心で考えていくことができるのではないかと思います。でするのでこの「きく」ということを大事にということなのです。

障がい者というのは、児童から高齢から幅広く障がい者という形になります。例えば障がいのある方が65歳で高齢の年齢になったときに、じゃあ、障がいがなくなるかといったらそういうわけではないです。なので今、相談支援センターは児童から高齢から幅広く関わっていく必要があるということ。それから障がい者の方も地域で暮らしているわけです。なので一市民です。他の市民の人との関わりがあるのです。それからそういう中で生活面の困窮、経済的危機を迎えている方もいらっしゃるかもしれないので、幅広く分野を問わずいろいろなところとつながりながら『基幹相談支援センター』としては「地域づくり」をしていかなければいけないということなのです。

真ん中に計画相談とありますけれども、計画相談の支援専門員さんは、生活を支える、それから生活を豊かにしていくための取り組みを、利用者さん相手に支援をしていく、マネジメントしていく役割ですけれども、そういう中で、サービス事業提供事業所さん、実際にサービスを提供

する事業所さんとのやり取りも必要ですし、その人たちと一緒にいろいろなジャンルの支援の人たちとつながりながら、一人の人を支えサポートしていくわけです。この皆さんたちと相談支援専門員がしっかり連携をして関係を作りながらやっていけるように、『基幹相談支援センター』のサポートさせていただく部分の一つかと思います。こちらにあるとおり、行政の方々とも協力し・連携しながらそういった活動を支えていく必要があることです。「きく」というのは心のトビラを開いて、それぞれ皆さんをつなぐ鍵ということで、これからも『基幹相談支援センター』としてはこういうことを大事にしながら活動を進めてまいりたいと思います。『基幹相談支援センター』の活動報告は以上になります。

続きまして『基幹相談支援センター』として、さらに医療的ケア児等コーディネーター事業の受託をしています。ちょっとややこしいですが、『基幹相談支援センター』として受託をさせていただいている医ケアコーディネーターといますけれども、その事業の報告もさせていただきたいと思います。活動の年間の内容は見ていただいたとおりになります。特に昨年度の活動の目玉としては、こちらの実態訪問調査をさせていただきました。当時区内では39名の医療的ケア児、常時医療的ケアが必要なお子さんをお持ちのご家庭のうち、29名のお宅に訪問させていただいて聞き取り調査ができています。これは医療的ケア児等コーディネーターが中心にやらせていただいているわけですが、行けるときは医療的ケア児部会の保健師さんなどメンバーの方にも一緒に同行してもらいながら実態訪問調査、家庭訪問をさせていただいている状況です。

この実態調査をさせていただいた結果は、恐らく昨年度の自立支援協議会の報告会で言われたことがあったかと思うのですが、留守番看護の時間の融通をきかせられるようにとか、留守番看護サービスをもっと使いやすくするところで、区として少し仕組みを変えてくれたところがありました。こういった形で調査をして、ニーズにのっとって区として仕組みを変えてくれる動きにもつながっているわけです。区として一度公にした仕組みを変えるのは、場合によってはなかなか大変だったりすることもあるかと思うのですが、そういった中でちゃんと仕組みを変えるところまで区として対応してくれたところは、とても良かったのではないかと思います。

そういう中、年度一年間通して医療的ケア児コーディネーターとして気がついたことです。障がい訪問時3者、具体的にいうと保健師・障害者福祉課のケースワーカー・医療的ケア児コーディネーターがそろって訪問することの大切さというところです。医療的ケア児のご家族は、もしかしたら医療的ケア児の子が退院してきて地域生活をする時にこんなことを思っているかもしれないですね。「実際何から相談したらよいのだろうか。どんなことを相談したらよいのだろうか。誰に相談したらよいのか。保健師なのか。障害者福祉課なのか」とか。あとは「子どもの面倒見てなければいけないから窓口に行けないんですけど」みたいにいろいろあると思うのですが、今後のことで今は不安でいっぱいな状況ということは想定されると思います。そういった中で、区役所など支援につながっているいろいろな支援(介護)が入っていくわけですが、その中で別々に訪問すると、例えばキャッチした保健師さんが訪問しますという時に「その内容については障害者福祉課のケースワーカーさんに相談してください」とか、あるいは障害者福祉課のケースワーカーさんが訪問した時に「そのことについては医療的ケア児コーディネーターに相談してください」とか、そういうことは全くないわけではないとは思いますが、あり得るわけです。結果的にそのつもりはないのは重々承知はしているのですが、たらい回しになってしまうみたいなことはあるんじゃないかと思います。ただ、ご家族の困りごとはやっぱり縦割りに考えることはできないのです。その都度訪問が来て、その都度同じような話を繰り返ししなければいけない負担感もきっとあると思います。なので、3者で訪問することでこういったことが改善できるのではないかと思います。

まず、一つ目が一度の訪問・面談で様々な不安、それから困りごとに対してそれぞれの立場か

ら情報提供がしやすいということです。一緒に3者で訪問していると「じゃあ、そのことについては保健師の私からお伝えさせていただきますね」とか、そういうことができるわけです。ちょっと似たようなことになりますけれども、内容に応じた相談窓口を明確にできる。その場に皆でいることで「その話は私が相談を受けますよ」ということができるのです。同じ空間にいる中でそうやって住み分けができることは、相談者にとって分かりやすいですね。あとは可能な手続きはその場で済ませられる。対応に慣れた保健師さんとかケースワーカーさんですと、事前にこういうことあるかなと思って申請書類を持って行ったりして、その話が出た時に「申請書を書いて下さい」とかその場でできる。そうすると親御さんは区役所に行って手続きをする必要が一つ減ります。そういったこともあると思います。そういった中で、結果的にたらいまわしになってしまうということが予防できるのではないかとということです。この話は実は医療的ケア部会でも共有されている話なのだそうです。ですけれど、あえて改めてこの場で、まずはこの3者での訪問をスタンダードにしていけたらということでこのお話をさせていただきました。ということで医療的ケアに関しては以上となります。

〇〇会長：

次の発表の前に今の件につきましてご意見・ご質問がありましたらどうぞ挙手をお願いしたいと思います。

〇〇副会長：

〇〇といいます。医療的ケア児のことを説明して気づかれた中で、3者がそろって訪問するということは大事なことと言いますけれども、果たして保健師・ケースワーカー・医療ケア児のコーディネーターが一括してまとまってその相談に乗れるかどうかという現実的なところなのですね、この3人が集まって相談に乗ってもらうことは大事なことなのですが、これが本当に実現するのか。保健師さんやケースワーカーさんも忙しいだろうし、これが3人そろって訪問するということは少し計画していかなければなかなか実現には難しいような気がします。こういうたらい回しにはされたくないということはもう昔から言われているので、この医療的ケア児だけの問題じゃなくて、いろんなケースにおいてもたらい回しにされることは今まで続けてこられたので、果たしてこの3者がそろって訪問するようなことが現実的にできていけるのかを事務局に聞きたいのですが。

事務局：

どれくらい実現できるかということはもちろんありますけれども、今この報告をいただいたように、大事なのはやはり「STOP・たらい回し」とありますけれども、やはりお客さん本位でしっかりと支援につながる。その場でスピード感を持って手続きなども行える、そういったところを目指していくことは必要なことだと思っております。この実現、スタンダード化不足はありますけれども、必ずしもできないかもしれないですが、そういった時はどうするのかいろいろと支援しながら実現に向けてやっていきたいと思っております。

〇〇基幹相談支援センター所長補佐：

説明足らずで申し訳なかったのですが、実は実際3者で訪問を何回かしたうえで「やっぱりこれ大事だ」という気づきになりました。3者で訪問したのが、最初にあつてのこの結果です。おっしゃるように、多分緊急性とか状況によって毎回3者で訪問するのは難しいかもしれないですが、3者で訪問してみた結果、やっぱりこの3者で訪問すると効果的だという話だ

ったと聞いております。

〇〇副会長： はい、ありがとうございます。

〇〇会長： 他にございますでしょうか。

〇〇委員：

『社会福祉法人すかい スクラムあらかわ』の〇〇です。ちょっと聞きたいのですけれども、相談実績推移のところ、なぜか4月・7月・8月・10月が多いとあります。医療的ケアの部分の報告の中にもこの月が多いとありますけれども、4月・7月・8月・10月は多くなる背景や要因が何かあるのでしょうか。

〇〇基幹相談支援センター所長補佐：

ちょっとその辺のところをしっかりと分析ができていないので、何ともお答えしにくいところがあるというところです。

〇〇会長： はい、補足をどうぞ。

〇〇委員：

補足をさせていただきます。さっき4月が多いのは『基幹相談支援センター』で大事にしている地域関係の巡回が多いので、4月は年度替わりで相談支援事業所、高齢関係の事業所、サービス提供の事業所、病院の訪問数が多いものですから、どうしてもそういったところで件数が多くなって来るのが4月と言えると思います。また7月・8月は巡回訪問を通じて『基幹相談支援センター』のことを知っていただいて、現場が落ち着いてきたところに余計に相談件数が増えてくるといった傾向がある気がします。10月については少し分析不足ですけれども、年度当初の巡回訪問をかなり意識的にやりますので、その影響が出てるのではなかろうかと思います。

〇〇会長： 他にございますでしょうか。

〇〇〇〇委員：

〇〇〇〇です。令和4年度か5年度に質問させていただきましたけど、計画相談の件です。計画相談を質問した時は、計画相談が何か所でやっているところの資料にも出ていたけど、その中でいっばいだというところが結構あったんですけど、その後令和6年度に入りまして、その辺の進捗状況といいますか、例えば新しく申し込みたいという場合はどこかに空きがあるのか。その辺ちょっとお願いいたします。

事務局：

計画相談につきましては、やはり依然としてセルフケアが存在しているといった状況であります。資料にありますけれども、振り分け会議というのを毎月行っておりまして、その中で何とか各事業所で受け持ってもらえるかどうか、調整を続けている状況です。相談支援事業所や相談支援専門員の拡大・充実につきましては、区の方でもこちらの課題だと思っておりますので、こちらのいろいろな拡大ですとか、また各事業所さんの連携とかそういったところで、受け付けられない人が1人でも少なくなるように検討してるところでありますので、そういった方が少なくな

るように引き続き努めてまいります。

〇〇会長：

よろしいですか。他にはございますか。なければちょっと時間押していますので、次に進ませていただきたいのですけれども、よろしいでしょうか。はい、お願いします。

〇〇基幹相談支援センター所長補佐：

続きまして、令和5年度のモニタリング検証の実施の報告をさせていただきたいと思います。令和3年度と4年度の2年間はモニタリング検証、地域事例検討を通して振り返る機会を持って学び合う、専門性のスキル向上を狙うというところで実施させていただいています。

令和5年度はがらっとやり方を変えさせていただきました。リアルタイムで相談支援専門員さんに学んでいただける場を作れたらということで、令和5年度はOJT型ということで、勝手に私たちが呼んでいるのですが、OJT型で実施をさせていただいております。内容は主任相談支援専門員と相談支援専門員がマンツーマンでやり取りを実施して、実践の中から学んでいただく。相談支援専門員さんに新規の事例を受け付けてもらって、その面談、インテークに主任専門相談員が同行します。同行するといっても、相談支援専門員さんの面談しているところを主任が見る形じゃなく、その逆なのです。主任相談専門員が相談支援専門員さんに新規面談の様子を見せるやり方をさせていただきました。なぜかと言うと、いきなり「面談の様子見せて下さい」といっても、相談支援専門員が皆引いちゃうわけですね。

なので、まず私たちが見せるところからいきましょうというところで、こういう形にさせていただいています。支援相談専門員に新規面談のスキルを現場で学んでもらって、いろいろ気づいてもらう機会を作ろうというところなんです。これが第1段階。第2段階としては新規面談の終了後2週間ぐらいで、お互いにサービス等利用計画を実際に作っていく。それを持ち寄ってお互いにフィードバックし合って「こういう事に気を付けながら作りました」とか互いにフィードバックし合って、「こういう事が軸だと思って作りました」とか、そういうやり取りをするのです。そういった中から、相談支援専門員に主任相談支援専門員からフィードバックをさせてもらう形で気づきを渡すこともやっています。最終的に相談支援専門員さんにはアンケートとしてどうだったかを書いてもらって、支援相談支援専門員としてどういうことをポイントに伝えたかを書いてもらって、それを区役所に提出させてもらう形でモニタリング検証を実施させていただきました。

実施した実際のアンケートの中に、相談支援専門員さんからは「事前には、主任からチェックされるのではないかと、正直恐怖心のようなものもありましたけども、実際はちゃんと意見交換はできて楽しくやれた」とか、あるいは、新規ケースについてじっくりと話し合う機会が、実は今までなかったと。周りにも相談支援専門員はいるのだけれども、その職場の中ではなかなかそういうやり取りはできなかったのですが、「今回モニタリング検証でやり取りできてやっぱりこういうのは大事だと感じた」「自分も勇気づけられました」「そういう意見交換がよい学びになった」という意見も聞かれています。あとは「自分だけが迷うのかと思っていただけでも、やっぱり主任さんも迷うのですねというところで安心感が得られた」という話も出ています。

一方、支援相談支援専門員からは、やっぱりガチンコ勝負なので、勝負じゃないですけど誤魔化しがきかないんですね。相談支援専門員のリアルな思考プロセスで、「この人はこういうふう考えるんだ、こういうことを気にするんだと、そういったところがマンツーマンでやることによって分かった」。あと「ご本人様へどういうふうに対応の仕方をしているかを客観的に見えた」とか。あるいは「アセスメントは、その人の心のどういうことを大事にしているのか、その人の思いをしっかりと、重みを感じる事が大事なのだということ伝えることができたのではないかと」

というようなこともありました。そういった中で、面接によって課題に関して必要な情報を得る技術、その情報を得てからそれをちゃんと言語化する、書類に落とすところの方法・スキル、そういう技術があればという課題がちょっと見られました。

あと関係機関との連絡調整に伴う社会性の課題というところですか。これは、例えば相談支援専門員と相談支援専門員さんでやり取りする時もちょっとレスポンスが遅かったりする。そういったところも、社会性というところでの課題があるのではなかろうかと勉強したところですか。相談支援専門員さんは法定研修、初任研修とか現任研修とかあるわけですがけれども、今日も現任研修を受けていらっしゃる方がいっぱいいらっしゃる。法定研修の中で最低限必要なスキルを学ぶことにはなっています。ただし実務的な、現場に必要なスキルはやっぱりそういう法定研修の中だけでは学ぶことができないというのは、やっぱり課題としてあると思います。ですのでOJTという形、地域に研修を終えた相談支援専門員が地域に戻って来て、OJTの中でそういったスキルを学んでいくことが大事になっていくのではなかろうかだと思います。ですので、今年度のモニタリング検証も、引き続きOJT型、昨年度と同じ形で実施をさせていただきながら相談支援専門員さんが現場の中で技術を学び直すこと。あとその中でスキルアップもしていったらえるように、モニタリング検証を実施させていただこうかと思っております。これでモニタリング検証についての報告は以上になります。

〇〇会長：

ただ今の内容について質問ございませんでしょうか。はい、どうぞ。

〇〇委員：

『基幹相談支援センター』の〇〇です。質問ではなく意見として一点だけ述べさせていただきます。モニタリング検証をやって、先ほど〇〇〇〇委員からもお話がありましたように、荒川区内には10か所の相談支援事業所があります。その中に1人で事業所を運営されている方、2人の方、中には10人ぐらいの事業所があるのですが、総じて1人、2人の事業所がとても多いのです。やはり1人、2人の事業所だとなかなか相互に情報を教え合うとか、相互にやり方を教え合うとかこういう機会に非常に恵まれなくて、国もそこを問題視し、3年も前になりますけれども、令和3年の報酬改定で、A事業所とB事業所は共同で一緒に相談支援事業をやるといって初めて認めてくれたのですが、これはまだなかなか全国的に進んでおりません。荒川区もその1人、2人の事業所が多いので、共同型の態勢で自分たちの質を高めるということ、国の面でもセットされ始めてきているので、ぜひ、荒川区の事業所としても共同型を推進していただければと思います。以上です。

〇〇会長：

他にございますでしょうか。ご質疑がなければ了承という形で進めさせていただきたいのですがよろしいでしょうか。

(一同了承)

〇〇会長：

続きまして次第5.「令和6年新たな取り組みについて」初めに障害者福祉課新規事業について事務局よりご説明をお願いいたします。

事務局：

荒川区におきましては、今年の3月に障がい者総合プランを新しく策定をいたしました。昨年度はこちらの協議会でもご意見をいただきました。その中でいろいろ計画した事業につきまして、今年度から始めたものをいくつかご紹介させていただきたいと思っております。

資料3-1.「難病患者や重症心身障がい者等への外出支援の拡充」です。(1)リフト付き自動車利用助成事業です。こちらは電動車椅子などを使用して外出する方の生活圏拡大などのために利用料金の一部を助成するものです。プランの方には現状として重度の方は車椅子やストレッチャーなど、移動の困難な方がいらっしゃるの支援が重要であるというところですので。その後の方向性として、やはりリフト付きタクシーの助成拡大など、環境整備を行う必要があると見定めてございます。(2)対象者は人工呼吸器など重症の方を主としております。(3)今まではリフト付きタクシーの予約料や介助料はすでに助成をしていたところですので。今年度より新しく3,900円を上限にした運賃も支援をする内容で開始させていただきました。

2.難病患者通院費助成です。難病の方に対して通院するためのタクシー料金の一部を助成するものです。(1)プランの記載ですけれども、区で実施する交通機関の支援でタクシー券を配っておりますけれども、これまでは手帳を取得している方のみとなっております。難病患者さんの方に対する支援がありませんでした。また、プランの中では難病患者の方はやはり病院が区外の方が多い。体調に波がある時でも病院に行く必要があるというところが課題でした。今後は難病患者を対象とした通院支援を実施するというところですので。(2)対象者は主に難病の医療費助成を受けている方を対象としております。助成内容は通院時にタクシーを利用した経費の、記載の助成額を支援する内容です。

資料3-2.「心身障がい者福祉手当対象者拡大」です。内容は、現状の心身障がい者手当につきましては、精神障がい者の方は全く対象外になっておりました。しかし以上の目的を考えますと対象とするべきであろうと議論も多くありましたので対象とするものでございます。(2)プランの記載も経済的困窮を訴える声があったり、障がいの程度や経済状態に応じて支給して福祉の増進を図っていく必要があるのが現状課題でしたので決めたものです。(3)支給対象はいろいろ細かい規定はありますが、精神障害者福祉保健手帳1級の方を対象としております。対象支給額は月額9,500円としております。上段の15,500円というのは都の手当です。都の要件の方はその金額で、区で独自に要件を追加したものは9,500円という仕切りで拡大をしております。(5)には支給決定者の現時点での情報を記載しております。

資料3-3.「たんぽぽセンターの児童発達支援センター化」です。1.児童発達支援センターとは発達障がいや発達が気になる未就学の子どもに対する療育支援のほか、施設の有する専門性を生かして地域の障がい児や家族の相談、また障がい児を支援する施設への支援を行う地域の中核的な機関としての施設です。2.障がい者プランには、現状と課題としては児童通所支援の利用者数は増加傾向にあり、中核的な施設が必要となるところ、またいわゆるインクルージョンの推進をするというところで推進体制を確保する必要があるといった状況課題、今後の方向性として『たんぽぽセンター』を中核的な施設に据えることです。3.『たんぽぽセンター』の事業の目的は、児童発達といったところで、発達に問題があると思われる児童の方に発達の支援を行うものです。児童発達センター化と合わせて療育の定員を拡大いたしまして、何とか1人でも多くの方の支援ができたかと思っております。また、相談支援事業で幅広い相談を受け付けるとともに、(3)成人向けの事業で機能回復訓練や生活訓練、ピアカウンセリング、介護相談など、障がい者の自立と社会参加の促進を図るといったところで実施しております。こちらは児童発達支援センターとは直接関係ありませんが、『たんぽぽセンター』の中に含まれる事業です。(4).(5)は児童発

達支援センター化と合わせまして順次機能を追加してきたものです。両方とも昨年度から少しずつ開始してきたもので、各保育所と訪問支援事業といったところで地域の保育所などにアウトリーチしまして、その中で集団生活に関するアドバイス・支援などを行うものです。(5)障がい児相談支援事業でサービスの利用計画の作成を行うところで、たんぼぼセンターでも開始をしたところです。4. 開始時期は今年の10月を予定しております。簡単ではありますが以上が当課での新規事業に関する説明とさせていただきます。

次にご説明をいただきます「拠点コーディネーターの配置」でございますが、国の方針において令和8年度までに配置することにされております。プランにおいてもそのように記載をしております。相談支援部会の地域生活支援拠点ワーキングにおいても配置を検討していることは前回の協議会でもご報告をしたところです。そしてこの度、ワーキングにも参加されている『ソラティオ23』より配置に関する協議がなされたというところです。当事業所はこれまでも計画相談や地域移行支援などの業務を行っており、拠点関係機関としての役割を果たしていらっしゃいます。さらに拠点コーディネーターを含めた職員配置のもとに、事業運営や緊急時支援・地域移行に関する支援のネットワークづくりを行うことができる事業所と考えております。また、今回コーディネーターとして配置された方々は、計画相談・地域移行などの経験と知識を備えていて、業務を担うことができる方として認められると、区としては判断いたしました。今後、他の関係機関の方から条件に合う方の配置のご相談があった場合には、随時協議をさせていただければと考えております。実際の業務内容については、拠点コーディネーターとして従事をいただいております〇〇さんと〇〇さんから、この後ご説明をお願いしたいと思います。ではよろしく願いいたします。

〇〇拠点コーディネーター：

ただいまご紹介にあずかりました『社会福祉法人ソラティオ ソラティオ23』の〇〇と〇〇と申します。令和6年4月より拠点コーディネーターとして配置されました。本日は、拠点コーディネーターの役割のご案内というテーマで、地域生活支援拠点の整備についてですとか、荒川区における拠点コーディネーターの役割についてお話をさせていただければと思います。

地域生活支援拠点の整備とは、障がいの重度化・高齢化や「親亡き後」を見据えつつ、障がい児・者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けるようにするため、障がい児・者の生活を地域で支える仕組みのことです。地域生活支援拠点については、平成29年度末までに各市町村に少なくとも一つ整備することとなっていました。全国的に見ると、必ずしも整備に向けた取り組みが進んではいない状況でした。令和4年12月の障がい者総合支援法の改正によって法律に位置づけられ、整備に関する市町村の努力義務が設けられました。地域生活支援拠点等の整備は多機能拠点型と面的整備型があります。多機能型は少しの施設で機能を担っている形をいいます。面的整備型は、地域の複数の事業所が機能を担い、全体で地域生活支援拠点を整備する形をいいます。

荒川区では、平成27年より面的整備型によって地域生活支援拠点の整備を開始しています。相談機能として『アクロスあらかわ』『スクラムあらかわ』『アゼリア』『コンパス』、緊急時の受け入れ・対応として『スクラムあらかわ』『グループホームひぐらし』、体験の機会として区内、近隣区のグループホームでの体験入居、専門的人材の確保・養成として、以前開催されておりました精神障がい者ホームヘルプ研修、こちら自立支援協議会で活用した地域の体制づくりなど、複数の事業所が地域生活支援拠点の機能を担っています。

繰り返しになりますが、地域生活支援拠点の趣旨は重度化・高齢化への対応や「親亡き後」を見据えつつ、障害児・者が地域で安心して生活することができる地域体制の構築です。地域生活

における安心の確保と地域生活への移行・継続の支援が地域生活支援拠点に期待される大きな役割です。地域生活における安心の確保と地域生活への移行・継続の支援を強化するため、令和6年度の障がい福祉サービス等の報酬改定において、情報連携等を担うコーディネーターの配置についての強化が新設されました。地域生活支援拠点の機能を充実させるため、市町村とともに効果的な支援の連携・体制を構築することを目的に拠点コーディネーターが配置され、拠点関係機関から構成されるネットワークの運営や機能の充実などの総合調整を図り、情報・連携等を担っていきます。当初、荒川は令和8年に拠点コーディネーターの配置を予定しておりましたが、令和6年度の報酬改定により前倒しして配置することができ、障がい福祉計画は達成されたといえます。

皆様のお手元に拠点コーディネーター配置のチラシを配布させていただいておりますが、こちらのチラシもご覧いただきながらご案内させていただければと思います。開いていただくと、中に見開きの説明文がございます。まず、荒川区の地域生活における安心の確保と地域生活への移行を推進するためにご本人を支えるチームのつながりを強化するのが、私たち拠点コーディネーターの役割となります。まず、役割その1.地域生活における安心の確保とは、すなわち環境の変化に対応できるチームづくりであって、例えばご家族の急な体調不良や入院等の緊急時の環境変化に備えて、ご本人を支える新体制を相談支援専門員等と作ることです。

こちらAさんのケースで見てください。「母の持病が悪化して、近々入院するかも」「母に何かあった時、Aさんは1人で暮らしていけるのか心配、どうしたらいいのだろう」と相談支援専門員さんから基幹相談支援センターに相談が入りました。基幹相談支援センターから拠点コーディネーターの紹介を受けます。拠点コーディネーターはご本人を支える連携会議を、これまでAさんの支援をしてきたチームと開催し、「家が好きです、家が良いです」とのご意向のあるAさんのことを一緒に考えます。一緒に考えた結果、将来的な暮らしを想定して、アフター（右側の黄色い部分）と書いてある方なのですけども、黄色の支援者たちがAさんを支えるチームに加わり、チームが強化されました。拠点コーディネーターはAさんの事例を通じて、「他の相談支援専門員さんも同じように悩んでいる人いるのかな」「短期入所の受入れ先が少なく1か所頼みだな」「自立生活援助の事業所も少ないな」という気づきがありました。拠点コーディネーターとしてはここで終わりではなく、自立支援協議会がワーキンググループに報告し、それらの会議体で検討していただくなど、個別支援を通じた地域づくりを展開していきます。

〇〇拠点コーディネーター：

次に役割その2.地域生活への移行・推進では入所施設や精神科病院からの地域生活に移行の方、ご家族からの一人暮らしやグループホームへの移行をバックアップします。Bさんのケースで見てください。拠点コーディネーターとして病院巡回をしています。巡回先の病院にてBさんに出会います。入院前は一人暮らししていました。「前みたいに暮らせるのか自信がないです」「病気を抱えて一人暮らしをしている人はいるのかしら」、拠点コーディネーターはBさんがこれからどこで、どんな風に暮らしていきたいか一緒に考えるため、ご本人を支える連携会議を、これまでBさんの支援をしてきたチームと開催します。一緒に考えた結果、将来的な暮らしを想定して（右側にある黄色の部分）支援者さんたちがBさんを支えるチームに加わり強化されました。拠点コーディネーターがBさんの事例を通じて「入院が長期化している区民の方が何人いるのだろう」「病院巡回少なかったらBさんには会えなかった」「動機付け支援と一緒にしてくれるピア看護婦さんが少ないな」「地域移行支援を受けてくれる事業所は1か所しかなくて少ないな」という気づきがありました。拠点コーディネーターとしてはここで終わりではなく、基幹相談支援センターや自立支援協議会やワーキンググループに共有し、それらの会議体で検討していただく

など、個別支援を通じた地域づくりを展開していきます。

〇〇拠点コーディネーター：

本日ご出席の皆様には、皆様のご所属先で拠点コーディネーターが配置されたことの周知と、拠点コーディネーターの活用をお願いしたいと思います。地域生活における安心の確保を担当する〇〇からは、事業所の皆さんへお願いがございします。拠点コーディネーターが事業所を巡回した際に、緊急時の備えが必要などではないかと感じる方がいらっしゃればお声がけください。また、日々の支援の中でのちょっとした違和感、ぜひ教えてください。例えばいつも親御さんが作ったお弁当を持参するのに、ここ一週間お弁当の注文をしている。障がい福祉サービスの更新手続きはこれまで親御さんが忘れずに行ってきたのに、今年はできていない。ご利用者さんの洋服が汚れている。それができていないなどなど。多くの時間をともに過ごしていらっしゃる職員さんだからこそ気づくことができる違和感。もしかしたら緊急事態が発生しているサインかもしれません。

〇〇拠点コーディネーター：

地域生活への移行・継続の支援を担当する〇〇からは、地域移行部会の皆様と相談支援事業所の皆様へお願いがございします。地域移行部会の皆様、一緒に病院巡回をさせていただき、地域移行の推進の体制整備に向けて考えていくことができればと思っております。入院している荒川区民の方が退院について考えたり、退院に向けて一歩を踏み出すサポートをしていきたいと思っております。相談支援事業所の皆様、地域移行・地域定着の指定、一般相談を行う事業所が少ない地域課題がございします。ぜひとも指定申請のお願いをいたします。今日お渡しした拠点コーディネーターのチラシにあるような役割1.と役割2.のようなケースがございしましたら、ぜひ拠点コーディネーターをご活用いただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

〇〇会長：

ありがとうございました。まず、先ほど区の〇〇課長よりお話をいただいて、その後に拠点コーディネーターの配置について『ソラティオ23』の〇〇さんと〇〇さんよりご説明をいただいたわけがございします。まとめて何かご質問・ご意見等がありましたら受け承りたいと思っております。

〇〇委員：

意見ではなくて、現状報告をちょっとさせていただき、皆様に共有していただければと思っております。まず、資料3-4になります、緊急時の受け入れ・対応ということで『スクラム』は対象外となります。実は先ほどの、なぜ、4月・7月・8月・10月と多いのだろうというところ。4月は先ほど〇〇委員からご報告がありましたし、10月はモニタリングかなと考えていたのですが、実は『スクラム』は今、緊急的な扱いがとても多く、「緊急、緊急」という形で短期を利用される方がすごく多くなりまして、職員が連続夜勤をしなければいけないぐらいの疲弊をきたしています。併せて、先に短期で予約を入れていただいているご家族の方にも利用調整をさせていただいて、何とかしていただくようにしているのですが、中には「それはちょっとお断りできないな」という形で、最終的には緊急の方で何とか受け入れながらも、先ほども言いましたように職員が連続夜勤を何回も繰り返している状況でここまで来ています。ただ、これからそういう形でどの職員も疲弊してしまっていて、実は緊急を受け入れることができない状況が多くなってきます。

これが課題の一つで、短期の入所施設が少ない部分が多くあるのではないかなと思います。

うちは緊急床を含めて12床あるというようなことで、かなり多いのですけども、その多さゆえに、東京都からは6人に対して1人の支援や夜勤が入らなければいけない。それも24時間入ってなければいけない。そうすると7人以上は2人の職員が入らなければいけない。それが24時間になると、報酬改定でもそうですけども、東京都から人件費がまったく付いてない。ですので、法人が負担をしながら人件費をやりくりする、法人たちもなかなか厳しい状況がありまして、人を雇うこともできない。そのために先ほど言いましたように職員が疲弊をしてしまって、体調不良が出てきたら、他の部分の職員がそこを補わないといけません。日ごろから難しい部分がさらにとこのような形が増えていることになります。なぜこの7月に緊急が多いのだろうかという部分も職員の中でも考えていたりするのです。決して暑さだけではない、高齢的な問題と時期的な部分、年齢的な部分があるのではないかと考えております。ですので、自立支援協議会の方でも、先ほど〇〇さんからも提案がありましたように、今後、短期という区分もどういうふうに荒川区で設けていくかというところを、ぜひ一つの課題として考えていただければと思っています。お時間を取っていただきありがとうございました。以上です。

〇〇会長： ありがとうございます。

〇〇委員：

精神の当事者の〇〇と申します。2点ほどお伝えさせていただきたいと思います。1点目、『児童発達支援センター』が今年10月から開設されるということで、荒川区の福祉が一步前進したというのを本当に喜ばしく思います。実は自分は発達障害の当事者なのですが、児童は18歳までということで、やはり大人が支援を荒川区内で受けるのは、まだまだ厳しい状況が続くのだろうと聞いております。ですので、例えば少しでも大人の人の相談も受けられるようにするのですとか、発達支援センターに発達障がい当事者のピアカウンセラーの相談を受け入れるような形にさせていただくとか、ちょっと拡充をお願いできたらうれしいと思います。2点目、拠点コーディネーターのお話で、私は肩書に3つ書かせていただいています、最後に『ピアなかまのわ』というふうに書かれています、こちら『アゼリア』のピアスタッフの〇〇さんが代表しております、現在、〇〇さんと一緒に病院の訪問をさせていただいております。なので、こちらの拠点コーディネーターの方々とぜひ、荒川区の入院患者さんの退院へ向けて一緒に手を取ってやっていけたらと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。以上です。

〇〇会長：

貴重なご意見ありがとうございました。他にございますでしょうか。ご質疑がなければこの件も了承という形で進めさせていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

(一同了承)

〇〇会長：

ありがとうございます。では最後に事務局から次回開催についてお願いいたします。

事務局：

次回の開催ですけども、10月ごろに開催を考えております。現在、調整中でございますので決まりましたら別途ご案内をさせていただきます。よろしく願いいたします。

〇〇会長：

本日も活発なご意見をたくさんいただきありがとうございました。それでは本日の令和6年度第1回荒川区自立支援協議会を閉会いたします。皆様ありがとうございました。

以 上